

「スイングジャーナル」四月号に、「私の六十年代の一枚」と題して、清水ミチコという方のエッセイが載っている。この人「ゴルデンアロー」新人賞を受賞と紹介されているから、将来性のあるタレントといってもよいだろう。父親がベーシストの上、

△⑨▽

日本人の琴線に



彼女の特徴をよくとらえて
いると感心したが、この名も
ないオランダの歌手バートン
が、七〇年この一枚で日本に
デビューするや、たちまち日
本人の琴線に触れて、人気投
票「ジャズヴォーカル部門」
で、本場アメリカの歌手を抜
いて上位にランクされてしま
うのだ。

飛騨高山でジャズ喫茶をやっ
ておられるとかで、子供の時
からジャズに親しんで育った
とある。

「私の一枚に選んだアン・
バートンの「ブルーバート
ン」はその当時店でよくかか
っていた一枚でした。ジャズ
ヴォーカリストの中には、い
かにもうまいだろうという歌
して、転戦中のホランダを追っ

てヨーロッパに飛んで「オラ
ンダ・グランプリ」を觀戦し
た。その期間中、アムステル
ダムのホテルからサーキット
に通う合間を、運河沿いのレ
とある小さなお店での「ヨ
ーロッパのジャズ」という

心こめて歌うアン・ バートンを見出す

一九六八年、まだ日本では
「F1」なんていう言葉がお
なじみではなかったころ、僕
はレースの実戦から引退し、
一人オートスポーツファンと
コード店を再念にたずねるこ
とで過(して)いた。

た。愁いに満ちた表情のジャ
ケット写真にも心打たれた僕
が、まだ地元でもよく知られ
ていなかった不遇の歌手の処
女作を、日本のジャズファン
にも聴かせたいと考えたのは
不思議な因縁だったのかもし
となく日本に招かれて、数多
のレコードを残すことにな
る。そして七三年三月、アン
・バートンは感謝の気持ちを
素直にこめて、僕らのYJC
のステージに上がってくれ
て、僕にとっても忘れ得ない
うれしい思い出になった。
ちよっと気取った言い方が



ヤマハジャズクラブのコンサートに出演した時のアン・バートンとドクター内田

僕の求めにこたえてくれたの
が、出たばかりという「ブル
ーバートン」のLPだった。
帰国後、訪ねて来た前田憲
男に聴かせて手こたえ十分と
いう感触を得た僕は、旧知の
ディレクターに解説も引き受
けるからと説得し七〇年発売

(内田 修)